

MOVIN'

高岡デザイン情報誌【ムーヴィン】

〔特集〕 Takaoka Design Movement ④
**新クラフト産業・デザインを育成し
 高岡ブランドの確立を支援する**

高岡市デザイン・工芸センターオープン

〔技・ヒト・モノづくりの情景／鍛金家〕
 シーン 川上 元美
 〔私のグッドなプロダクト〕 川上 元美
 〔私と高岡クラフトコンベ〕 町田 傑一

2000 VOL. 9

ISSN 0918-7111

高岡デザイン情報誌【ムーヴィン】

VOL.9 2000年3月31日発行

写真提供・取材協力

岩手県立産業デザインセンター
 淡海クリエーターズクラブ事務局
 大澤幸勝
 川上元美
 斎藤慎二
 三協アルミニウム工業株式会社
 株式会社サン美術工芸
 高岡市建設部港湾課
 高岡市商工労働部観光物産課
 高岡漆器株式会社
 高岡漆器青年会
 高岡市都市整備部建築指導課
 高岡巧美会
 国立高岡短期大学
 伝統工芸高岡銅器振興協同組合
 株式会社タカラレムノス
 武山良三（国立高岡短期大学助教授）
 立山アルミニウム工業株式会社
 梶間秀人
 デザインウエーブ開催委員会
 富山県総合デザインセンター
 社団法人富山県デザイン協会
 鉛レス素材開発研究会
 株式会社ニュースインターナショナル
 ファインプロジェクト
 藤島一貴
 町田傑一
 (50音順・敬称略)

STAFF

Published by
 高岡市デザイン・工芸センター
 〒939-1119 高岡市オフィスパーク5番地
 TEL0766-62-0520
 Executive Editor
 Masayoshi Kimura
 Art Director
 Hideaki Souma
 Designer
 Yukiko Azuma
 Takako Nishikawa
 Ayano Imada
 Writer
 Satoshi Kitayama
 Azusa Hase
 Rie Morinaga
 Mahiro Yoshizaki
 Photographer
 Youichi Ishihara
 Tomoeki Kanatani
 Printed by
 相互企画印刷㈱

MOVIN'<ムーヴィン>は、MOVINGの略形で、「動く」・「進める」・「感動させる」という意味を持ちます。

デザイン情報誌<MOVIN'>は、高岡の街や人、企業そして行政の動きを「デザイン」というアンテナでキャッチ、ユニークな切り口でご紹介します。
 また、MOVIN'は高岡独自のデザインパワーを市内外に発信していくとともに、高岡の未来に向けて「新しいデザインの動き」を生み出していく情報を目指しています。



街角デザインフォーカス

「エル・パセオ」は、高岡市御旅屋西通り地区で進められてきた、市街地整備・再開発事業として平成11年10月に完成した再開発ビルである。JR高岡駅から北へ約500mの中心商業地に位置しており、建物は地下1階から地上2階が商業・業務ゾーン、3階から最上階の13階までは市営住宅(55戸)となっている。

エル・パセオはスペイン語で「弾むような活気のある散歩道」という意味があり、その名の通りショップや路地空間にはスペインの香りが漂い、陽気な気分で散策が愉しめる空間になっている。隣接するように御旅屋市営駐車場、御旅屋セリオや御旅屋通り商店街、ホテルニューオータニ高岡が点在する。また、高岡古城公園や高岡大仏、土蔵造りの町並みといった観光スポットも近いことから、回遊性をもなながら中心市街地の活性化を刺激するゾーンとして期待されている。



※表紙写真:エル・パセオ

新クラフト産業・ Takaoka Design Movement

デザイナーを育成し
高岡ブランドの確立を支援する

④

地元産業界やクラフトマン、デザイナーの期待を一身に担つて、高岡市デザイン・工芸センターがオープンした。同センターは、「新クラフト産業・デザインの育成」、「伝統工芸の保存・継承」、「デザインや工芸の啓発・普及」を活動の三本柱とするが、オープン以来の活動を交えながら、その内容を紹介する。

平成十一年九月二日、高岡市デザイン・工芸センター（以下、デザイン・工芸センターと略）がオープンした。同センターは、伝統工芸産業が培ってきた技術や技法を守りつつも、時代を反映した新クラフト製品がつくられ、それが産業へと発展するよう支援することを目的に設立されたもの。第三セクター方式の富山県産業高度化センター、富山県総合デザインセンターと

ともに一体的に建設され、サン・センター（Sun Center）を形成し、高岡市戸出地区のオフィスパークの一角に誕生した。
竣工式の翌日から、サン・センター一階展示室において「ニュークラフト展」が催された（九月コラム①参照）。

企業やクラフトマンに情報を発信

自身が直販もする体制を確立する、「市場を拡大するために観光開発を進める」の三つに取り組まなければならないと提案された。（二頁コラム①参照）

三日～二十六日）。この展示会は、一九八六年から「工芸都市高岡クラフトコンペティション」を実施してきた高岡市のデザインプロモーションの成果の一端を示すものといえる。

同コンペは、もの（ものづくり）を通して新たな潮流をビジュアルに提示し、伝統工芸産業に新しい動きを誘発するために企画されたもの。コンペを契機として、高岡に蓄積されている多種多彩な技術と、職人のスキルの高さにデザイナーやクリエーターが触発され、また伝統工芸産業の関係者も消費者ニーズに目を向け始めたのである。

こうした中で、デザイナーやクリエーターと地元企業とのコラボレーション（共同作業）が生まれ、彼らの新鮮で自由な発想と、デザインという視点からのアプローチによって、今という時代にマッチした新クラフトが誕生してきた。またこのコラボレーションを通して、地元企業は高岡の潜在的なものづくりの能力を再発見するとともに、デザイン開発の重要性を認識。さらには、市場の創造を視野に入れたトータルなもののづくりの必要性も実感するようになった。

この意識改革の過程で生まれたのが、デザインマインドにあふれた新クラフトの数々。「ニュークラフト展」では、素材の可能性を引き出すことを試みるデザイナーと地元企業のコラボレーションから生まれた黒川雅之さんのクロック、趙慶姫さんの香立て、澄川伸一さんの漆のコーヒーテーブル「一輪」をはじめとする一六九点の作品が展示された。

また、竣工式があった九月二日の夕方には、オープニング記念イベントとして黒川雅之さん（建築家・プロダクトデザイナー）を講師に招いてのスタディーツーク＆フォーラムを開催。「高岡の21世紀を考える—21世紀はどうなるか、高岡

の未来への提言」のテーマのもと、黒川さんは高岡の伝統工芸産業の復興、新クラフト産業興隆のためには、「生産者、流通業者、デザイナー、行政などが協力して生産開発をする」、「生産者自身が直販もする体制を確立する」、「市場を拡大するために観光開発を進める」の三つに取り組まなければならないと提案された。（二頁コラム①参照）



サン・センター(Sun Center)の外観



ニュークラフト展

高岡の21世紀を考える
スタディーツーク&フォーラム

メイド・イン高岡セレクション展

国際フォーラム—高岡ワーキングショップが催された。フォーラムでは、「写ルンです」の企画開発に携わった田中中央さん（田中デザインオフィス代表）が「もうひとつの、デザイン—次世代に求められる『ミレニアムデザイン』」と題して講演。その後、清さん（武藏野美術大学教授）、黒川玲さん（建築家・プロダクトデザイナー）を交えてのパネルディスカッションが持たれた。（三頁—コラム②参照）

さらには十一月十八日、荻野克彦さん（プロダクトデザイナー・荻野克彦デザイン事務所代表）を講師に招いてのデザインセミナーが企画され、「アサヒビールと日産の差」を地場産業

についていたぐく（消費・購買）とはどう違うことがを考えなければならないのではなく」というのが、いか」というのである。

そして二番目は「インターネットを駆使して直販する。生産者が自らが売る体制を整えることが必要である」と提言。三番目は市場の開拓。商品を買っていただためには、消費者を高岡に呼びが必要がある。それはある意味では観光客の誘致であるから、「市場の開拓は、観光客が集まる都市づくりと置き換えること」がかかる」と高岡の未来への提言を結んだ。

の立場から考える」の演題のもと講演していた
だいだ。(五頁—コラム③参照)

これらのフォーラムやセミナーは、新クラフト
産業やデザイナー、クラフトマンを支援するた
めのもの。クラフト産業やデザインの方向性、
将来性、可能性などの貴重な情報を得るばか
りでなく、それを契機として聴講者自身が探究
するという、ある意味では問題提起の場となっ
ている。また、こうした機会を通して高岡のリ
ソース(資源)や伝統を創造的にとらえ直し、素
材と技術とデザインによって開拓する新クラフ
ト産業の育成を目指そうというのである。

工コロジーやリサイクル対策のため
鉛レス銅合金素材の開発を目指す

デザイン・工芸センターでは、新素材の開発や
複合素材による商品開発の支援などにも取り
組んでいる。新しい素材の開発として平成十一
年度にテーマとしたのが、銅合金における鉛の
排除。すなわち「鉛レス」の開発である。
鉛は融点が低く、加工性にも優れているため
電子基板のハンダづけや合金メッキなどで使わ
れ、その用途の幅が広い。ところが、破棄され
た製品が酸性雨にさらされると鉛が溶け出す
危険性があり、それが環境や健康に悪影響
をもたらしかねないことが明らかになった。そ
のため、家電メーカーなどではハンダづけの際、
鉛を使わない研究を本格化させている。

高岡市においても、いち早く鉛レス銅合金素
材の開発に取り組んだ。前述のように人の健
康への配慮のため、また関心が高まりつつある
エコロジー・リサイクルの問題に対応するため
に、平成十一年七月、デザイン・工芸センターの
呼びかけにより「鉛レス素材開発研究会」が発
足。高岡銅器業界の鋳造、地金、着色などの一
すから、そういう消費者が満足するよ
うな商品をつらなければなりません。
ただ、产地としても努力すべき点
はあります。蛍光灯による生活が大
半の住環境では、従来のような汎味
のある色合の銅製品は、消費者に
敬遠されているのかもしれません。

また漆器も、赤と黒ではコントラストが強過ぎるので、色
合や表面処理を工夫しなければならないでしょう。
環境保全に対する意識の高まりも、产地としては認識
も企画しています。伝統工芸を身近に感じていただくこ
とは、潜在需要の掘り起こしに一役買うでしょうし、指導
に当たる職人さんと一般市民を結びつけることにより、
既存商品の改良や新製品開発の糸口ともなるのではないか
と思っています。

コストダウンの波に浸るだけでは、伝統工芸の產
地はいずれ危機に瀕してしまいます。でも、時代がどんな
に変わろうとも、手づくりの風合いを求める人がいるので
高岡市デザイン・工芸センターは、そのお手伝いができる
機関になりたいと思います。

ものづくりの町・高岡の文化を守り デザインや工芸を啓発・普及する

く誕生させようとしている。

とともに高岡市にはものづくりを支援する
気風が満ちている。それは四〇〇年前、加賀
藩二代藩主前田利長公の銅器・漆器を中心と
する殖産興業政策に端を発しているが、支援機
関としては明治四十二年に設けられた高岡物
産陳列所がその始まり。以来、時代の状況に即
応して事業の見直しや組織の改編を行い、前身

企業展も冒頭に紹介したもののはかに、高岡
の高岡市工芸デザイン指導所を経て、デザイ
ン・工芸センターへと至った。

同センターには、ガス炉・トランジスタ式高周
波炉・鋳造用ミキサー・プラスターを配備した
鋳造場のほかに、回転装置付漆乾燥庫・自動乳
塗装焼付乾燥機・金工関係工具類がある造形・
体験工房などが整っている。これらの設備は、
前出のような実験やクラフトマンの創作活動を
支援するために使われるほか、「伝統工芸の保
存・継承」事業にも効果的に活用されている。
当事業は、工芸デザイン指導所より引き継いだ
ものだが、指導所時代にはなかった鋳造場が整
備されたため、鋳物などの技術指導も可能に
なった。



の高岡市工芸デザイン指導所を経て、デザイ
ン・工芸センターへと至った。

従つて、五八〇人あまりの修了生を輩出して
きた「伝統工芸産業技術者養成スクール」は、漆
工全般はもちろんのこと、原型づくりから鋳造、
仕上げ、着色までの金工の技術指導もでき、内
容の充実が図られることはいうまでもない(平
成十一年度の伝統工芸の保存・継承事業は一六
頁に一部紹介)。また、伝統的工芸品の技術・技
法を継承する人材の育成事業や、伝統工芸產
業技術者指定表彰事業などは、指導所時代と
同様に実施していく。

時代より格段に増えてきた。講演会やセミナ
ーの聴講のほかに、新素材の開発などの各種実
験、クラフト試作、高岡クラフトコンペのグラン
プリ受賞作品(常設展示)の見学やパソコンを活
用してのデザインの考案、またライブブリーフサ
ロンでの「デザイン・工芸関係の専門書(一五〇〇
冊収蔵)の閲覧など、さまざまな目的を持って
集つてくる。

企画展も冒頭に紹介したもののはかに、高岡

一方、複合素材による商品開発にも新たな
動きが出てきた。伝統工芸高岡銅器振興協同
組合と志村雄逸さんのコラボレーションによる
八尾、ステンレスは東京や千葉、光ファイバーは
柄木、そしてメカは東京や埼玉と、各地の素材
により構成されている。同協同組合では、他素
材との融合、ことに光ファイバーや電子基板と
いうハイテク技術と鉛物や和紙の伝統的な素材
が織りなす新クラフト感覚の照明器具を評価
し、商品化も決定している。

またデザイン・工芸センターでは、金属とガラ
スの新しい融合を試みるために富山ガラス工房
とのコラボレーションも開始した。ガラスを溶か
す段階から金属と融合させるための実験など
に取り組み、さらには他産地との技術の融合も
計画中である。

伝統工芸といえども、イノベーション(技術革
新)を繰り返してきた。数百年の間、同じ素材
や技術でのをつくってきたわけではなく、常に
工夫や改良が試みられてきている。デザイン・
工芸センターではそれをさらに積極的に支援
し、新素材の開発や複合素材・複合技術の組み
合わせにより、今を生きる新クラフト製品を多



鋳造場内のガス炉を利用し、鉛レス素材開発に向け実験



鉛レス素材開発研究会



基調講演に立った田中央さんは、「デザ
インとは、ある目的に向けて計画をして、
問題解決のための思考概念の組み立てを行
い、それを可視的・触覚的感覚によって
表現・表示すること」と定義。「可視的・感
覚的感覚によって表現・表示するためには、
「イメージ」・「関係づける」作業が必要
であり、この「関係づける」という働きが
インの大きな特徴である」といふ。
また、デザインにはメタファー(暗喩)、
メタリフィ(擬態)、デフォルマシヨン(変
形)、トポロジー(位相)などの関係づけ
の手法があるが、そこにデザイナーの感
情や考え方を入れていくと、従来の枠組
みを超え、非常識ではなく「異常識」な考
え方に至ることもある。異質なものの融
合からこそ、創造性に長けた商品が生ま
れると言つた。

そして新生紀をつくる「アート・デザ
イン」は、みんなで考え方を持ち寄って水平討
議の手法があるが、そこには商品が生ま
れると言つた。それは「コンセプトも含めてのことで、
さまざまシンユニアシヨンやネットワー
クの中での合意を得ることも前提になっ
てくる。個人や組織のバリアが取り払わ
れた中から新しいデザイナーのビジュヨンが生
まれるだろうと、田中さんは結んだ。
続くパネルディスカッションでは、「企業と
地域をデザインつなぐ 改めて語られる
デザインの役割」のテーマで話し合われ
たが、鷲山昌二さんは「銅器の町・高岡は、
じつに鋼器博物館があるのがわかつて」。

漆器の斬新なテーブルウエア群を紹介した「漆器ニューライフ展」、第二次世界大戦時の経済統制下から五〇年にわたるものづくりの足跡をたどる「伝統工芸・高岡ヒストリー展—1940

—1990—」、ものづくりの町・高岡で生まれたニードクラフト、ニュープロダクトの中から暮らしを彩る商品を展示了した「メイド・イン高岡セレクション展」などが開催された。これらの展示会には一般市民も見学に訪れ、デザインやクラフトについての啓蒙とともに、古くて新しい町・高岡への認識を深めることに役立っている。

手づくりの価値を再発見し ものづくりの楽しさを啓蒙

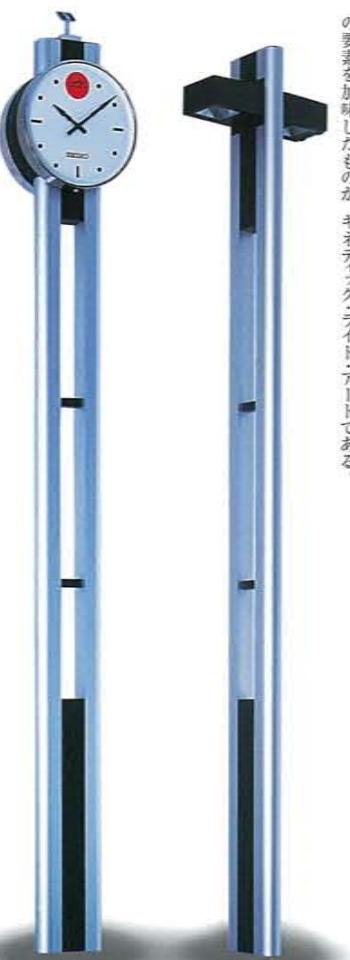
また、市民を対象にして開いてる銅器や漆器の工芸実習も、デザインや工芸の啓發・普及に一役買っている。オープン以来半年間の、工芸実習の制作課題を拾い上げてみると、铸物のルームブレート、铸物の日時計、螺鈿を施した石のペーパーウエイト、铸物のキャンドルスタンド、蒔絵を施した手鏡、蒔絵の雛人形など、どれも身近なものばかり。それも、十二月初めにはクリスマスを意識してキャンドルスタンド、二月には雛人形というように季節感を演出。ほかの時には生活の中で使えるもの、また流行している雑貨の中から銅器や漆器でつくれるものを選んで制作課題にし、市民がものづくりに親しめる工夫と配慮がなされている。

工芸実習の講師を務めている齊藤慎一さん（塗師）と梶間秀人さん（金属工芸デザイナー）に話をうかがった。二人とも「工芸実習は手づくりの価値を再発見するいい機会になっている」と指摘し、齊藤さんは「曲面に線を引くって難しいんです。特に直線は定規を当てるわけでもないから、熟練した技術が必要。それを受講生



オルムが評価され、通商産業省のグッドデザイン賞には高岡ブランドの商品が数多く選定されている。

中でも昨年度にグッドデザイン賞を受賞したアルミ景観材シリーズ「タウンズ・スパイズ」（時計台、ベンチ、街路灯）は、これからものづくりに示唆する点があるといえよう。



アルミ景観材シリーズ「タウンズ・スパイズ」時計台、街路灯
(三協アルミニウム工業株式会社)



『塗りでマイカップをつくろう』の体験実習風景



高岡市デザイン・工芸センター 〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク5番地 TEL.0766-62-0520 FAX.0766-62-0521 http://www.suncenter.co.jp/takaoka/

としての有意性があると認められたのである。

デザイン・工芸センターは、こうした新クラフトが数多く誕生し、それが産業へと発展するのためには、市場ニーズをくみ上げ、エコロジーやリサイクルという環境負荷低減にも取り組まなければならぬ。また時代や地域の要請を見極めたタイムリーなテーマを設定し、新素材の開發や異素材との融合も展開しながら試作モデルの制作を行うことなども必要となってくる。岡においては、それらを活発にし、トータルなものづくりを支援する実験工房の役割を果たすために、デザイン・工芸センターは生まれた。

（＊1）従来の伝統工芸や美術工芸とは「一線を画した、創造的でデザイン性のある雑貨やインテリアなどのクラフト。景観材分野なども含む。産業としての広がりを持つ製品群として、「新クラフト産業」とよられる。

（＊2）貸貸オフスキンキュベータ室を備え、新規事業に乗りだす企業を支援する機関。

（＊3）プロダクトやインテリア、ファッショングなど産業のデザイン振興を図る機関。考案したデザインモデルを制作できるモノアップ工房を備えている。

（＊4）高岡市デザイン・工芸センター、富山県産業高度化センター、富山県総合デザインセンターの三つの機関が一括的に建設された建物の愛称。「三つのセンターが地域産業を照らすエネルギーが湧き出る太陽になるように」という願いから、この愛称がつけられた。

（＊5）キネティックアートは、動く芸術の意。芸術作品は通常、静的なものであるが、これに動きを加えたものをいう。そこに光の要素を加味したものが、キネティックアートである。

受賞に当たって同シリーズは、アルミ素材の美しさや周辺環境との調和を考慮したトータルなデザイン、アルミのリサイクル性を最大限に生かした構造設計が評価された。特に時計台は太陽電池を採用することによるエコロジー対策を図ったこと、街路灯は省エネ性に優れたセラミック発光管・メタルハライドランプを用いてランニングコストの削減に努めたことなどが、公共材

70%、樹脂30%）を使用してエコロジー対策を図ったことなど、公共材

のみさんは自分でやってみて「こんなに難しかったんだ」と実感される。銅器でも同じでしようが、こういう体験を通して、よいものとは何かといふても、子どもの遊びの延長みたいなもの多かつたけど、中には「もう一工夫すれば商品化できるかな」という作品もありました。仕事は工芸とかデザインとは関係のない方でしたら、それが、素直に「こんな形のものがあつたらしいな」を表現している。僕にはそれが、いい刺激になります」と実習を振り返って語った。

また工房を営むかたわら、金沢美術工芸大学で講師を務める梶間さんは、「市民の工芸実習時も、結局はトレイみたいなものをつくった人が多かつたけど、中には「もう一工夫すれば商品化できるかな」という作品もありました。仕

事が、素直に「こんな形のものがあつたらしいな」を表現していました。铸物の香皿をつくった

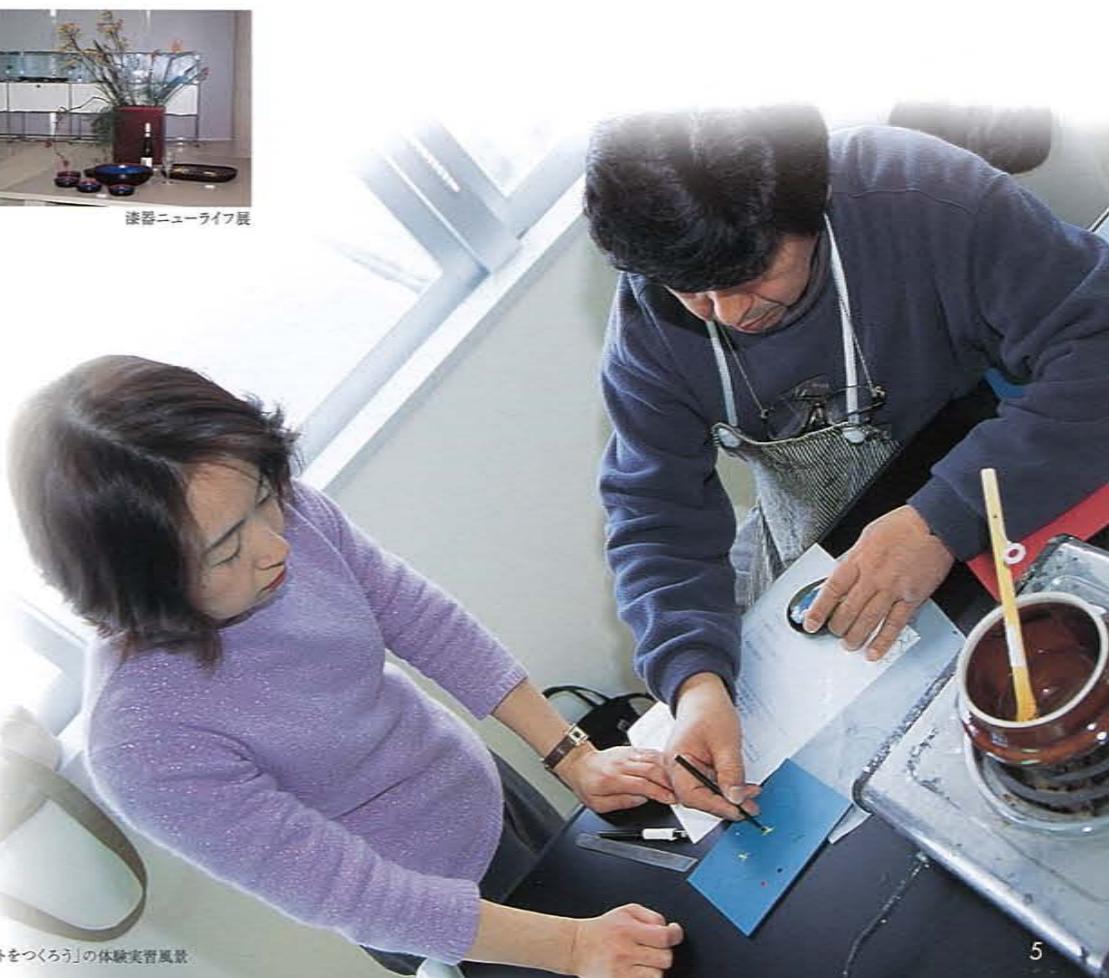
が、それが、いい刺激になりました」とコメント。

高岡ブランドの確立を目指して トータルなものづくりを支援する

工芸実習はクラフトマンや職人を刺激し、それがまた創作活動に生かされていく。こうしてみると、新クラフト産業やデザインの育成、伝統工芸の保存・継承、デザインや工芸の啓發・普及というデザイン・工芸センターの活動コンセプトは相互に関連し、相乗効果をもたらして高岡ブランドの確立を目指していると言えます」とも言える。

年度末の平成十二年三月八日～二十日の間には「メイド・イン高岡セレクション展」が催された。同展示会では、地元高岡でつくられたレバーハンドルやキャンドルスタンド、アラームクロック「GooGoo」、スライド扉、ダブルオープナーなど九八点が紹介され、来場者の目を引きつけた。

いずれの商品も、ナショナルブランドに勝るとも劣らないものばかり。斬新なデザインや工芸実習はクラフトマンや職人を刺激し、それがまた創作活動に生かされていく。こうしてみると、新クラフト産業やデザインの育成、伝統工芸の保存・継承、デザインや工芸の啓發・普及というデザイン・工芸センターの活動コンセプトは相互に関連し、相乗効果をもたらして高岡ブランドの確立を目指していると言えます」とも言える。



伝統工芸・高岡ヒストリー展



漆器ニューライフ展

COLUMN 3 デザインセミナー

講師の荻野克彦さんは、アサヒビールと日本自動車という厳しい経営状況を迎えた企業を例に挙げながら大胆、以下のよう話を進める。

日産自動車はかつては「技術の日産」と愛着を込めて呼ばれていた。しかし、道路事情がよくなつた現代では日自動車に求められる技術の内容が変わり、今日では環境が一つのテーマになつていて。他の

メーカーではいち早く環境対策に取り組み、車の軽量化や省資源をテーマにした。

これが消費者の共感を呼んで販売台数を増やすという結果になった。今はつくれば売れるという時代ではなく、商品に対する消費者の共感が大きなポイントになつた。この点、日産は出迎されたように思われる。

アサヒビールも一時低迷を経てはいた。食事のあり方やビールに対する嗜好が変わつていて、かつての越しのいいものに軽く手を離さず、従来通りのビールを生産していた。ところが、トップが交代することによって考え方も一変。脂っこい料理に合うようビールの口当たりを軽くし、かつての越しのいいものに軽く手を離さず、従来通りのビ

ーールを生産していた。当然、古いビールや生産ラインを捨て、新しいビールにかけなければならない。またビールは鮮度がいいとおいしいので、流通在庫の日数を短縮する努力を全社員が取り組んだ。社員一人ひとりが問題意識を持ったからこそ、アサヒビールは立ち直ったのである。

ものを持つるところの形や内容を企画するところに始まり、最後は消費者に買っていただき満足してもらうことだから、正しく經營することだ。展示会に出かけるにしても、最終日に行つてどんな商品が売れたか、入場者はどれくらいいかどんなどスフレイにしているか、などをリサーチすることも大切。また、ユーザーが手ごろな価格だと思つよな、コストタウンの努力もしなければならない。そういう中で、消費者の共感を呼ぶような商品を企画していくば、売れるのではないかと想つ。

技・ヒト——モノづくりの情景

【第四回／銅金家】



鋭い視線で原型を凝視し、その形状をあらゆる角度から分析する。複雑な原型から鋳型を外すには、いくつものディテールに分割しなければならない。多いときには、百を超える部分的な鋳型から一つの鋳型が構成されることもあるという。瞬時に頭の中で組み立てられた鋳型のイメージは、熟練した手技で形状一つひとつが忠実に再現され、原型の分身と化す。たとえ寸分の狂いなく仕上げた鋳型でも、まだ完成品とはいえない。技と精神を込めて生み出した土の「作品」は、壊されて鋳物に姿を変えた瞬間、はじめて完成するのだ。

たまたま焼型铸造の世界に

多彩な道具が整然と棚に並べられ、窯入れを待つ鋳型がいくつも床に転がっている。普段は静かに構える窯や溶解炉に火が入ると、夏場なら室温五〇度に達するという。銅金家・大澤幸勝氏は、この工房で鋳型づくりから铸造までを手がけている。四十年以上も焼型一筋だ。しかし、当初から銅金家を志していたわけではない。専業農家に生まれた大澤氏は、会社勤めよりも家業の手伝いに融通がききそうな職人の道を選択。そこが、たまたま高岡銅器の焼型铸造所だった。仕事はきつ、連日徹夜が続くこともあったといふ。

同じ原型でも鋳物の仕上がりは違う

最初の一年は、もっぱら雑用と土の配合に費やされ、簡単な鋳型をつくるまでに三年の歳月を要した。複雑な形状の原型は、「寄せ」といわれる部分的な鋳型を組み合わせて型取りされるが、その分割方法ひとつをとっても職人の技量が問われる。同じ原型でも、職人の腕やつくり方によって、まったく違う仕上がりになるといふ。それは、鋳型を高温で焼き、溶かした金属を流し込む一連の作業にも通じる。微妙な温度の違いやタイミングのズレが、鋳物の仕上がりを大きく左右するからだ。生き物と表現



【平成の大日如来座像】铸造をはじめ、仕上、象嵌、着色の第一線で活躍する技術者と共に制作。高岡銅器の技術を後世に残すためにつくられた逸品である。

される土や銅、そして炎との真剣勝負に、気を抜くことは決して許されない。そんな焼型铸造法の奥深さに触れるうち、より高く、独創的な技術・技法を追究するようになつた。一度腕が落ちると、二度と元に戻らない

大澤氏の仕事は、土の配合から鋳型づくり、鋳型の焼成、金属の溶解、铸造と多岐にわたる。そのどれをとっても、一片の妥協もない。「一度、手を抜くと技術が落ちる。そうなると、職人の腕は二度と戻らない。だから、どの作業にも全力で取り組むことを心掛けている」という大澤氏の夢は、高岡銅器の技術・技法を後世に伝えていくことだ。「先人たちが築き上げた伝統を受け継ぎながら、さらに発展させた技術や技法を残したい」と大澤氏。その言葉を実践するように、高岡銅器の技術の粹を集めた作品『平成の大日如来座像』や、独創的な技法『鎔包み』を生み出している。



大澤幸勝（おおざわ ゆきまさ）
雅号：光民（こうみん）

1941年 高岡市生まれ
1957年 富山県立職業補導所銅器科へ入学
1958年 越井銅器製作所に入社
1969年 大澤美術铸造所を創立
1972年 日展入選（以後、2回入選）
1974年 富山県美術展県知事賞（以後、数回入賞）
1975年 高岡伝統工芸加工技術振興展最優秀賞（翌年も最優秀賞）
1976年 高岡市伝統工芸産業優秀技術者表彰
1977年 伝統工芸士に認定（銅器铸造部門）
1980年 鎔包み铸造法を考案
1994年 产地伝統工芸士会功労者表彰
1995年 高岡市伝統工芸産業技術保持者に指定（焼型部門）
1996年 高岡市教育功労者表彰
1998年 伝統工芸品産業功労者表彰（中部通産局長）



①形状によっては、いくつもの「寄せ」を組み合わせる。②土の混合には、ふるいや機械などを使う。③用途に応じて、粒の細かさが違う土を使い分ける。④地金は、溶解炉で約1,200度に熱して溶かす。



【焼型铸造法】鋳型は、粘土や水、和紙の繊維を調合した土などでつくり、約900度で8~15時間程度かけて全体を素焼きにする。これを約400度まで自然冷却させ、溶かした地金を流し込む。地金が一気に冷めないので、きめ細かい焼型に仕上がり、着色によって独特の艶や深みのある色が表現される。鋳物の材料には、比較的銅の成分が多い地金を使用。原型を損なわずに、小型から大型まで複雑な形状を再現できるため、仏像、図書、香炉などの製造に適している。





川上 元美 (かわかみ もとみ)
デザイナー



〈まちなみ景観部門〉最優秀賞／池之端通り



〈住宅部門〉優秀賞／竹澤邸



〈住宅部門〉優秀賞／盤若邸



〈住宅部門〉優秀賞／藤田邸



〈まちなみ景観部門〉優秀賞／カリヨンのある街

課番 0766-20-1429
(問)高岡市都市整備部建築指導



デザイン事務所内) 0749-85-2340

平成十一年度高岡都市美景観賞
最優秀賞は、古城公園の自然と
長い歴史が調和した池之端通りに
建築物・建造物・まちなみ景観の四部門
に計四件の応募・推薦があり、平成十
一年九月七日、芸術や環境、建築など七
名の専門家によって選考された。

最優秀賞は、まちなみ景観部門の「池
之端通り」。道路西側を少し退いた空間

に、庭や車置き場、花壇などを配した木
造一階建て家屋が建ち並び、東側には古
城公園の噴水や欄干、柳並木が整備。昭
和時代の物静かな風情を感じさせる街
区となっている。

選考委員で国立高岡短期大学の谷口
教授は「四季折々、多彩に変化する自然
を借景とした景観が、長年の歴史と共に
創り出されている。でもまだ十分では
なくブロック塀や外壁、電柱などの整備

が今後の課題になろう。住民の景観形
成に対する意識の一層の高まりを期待
したい」と講評した。

優秀賞には、住宅部門から「木とコン
クリートの混合構造で、見る位置によつ
て表情が変化する遊び心がある」竹澤
邸、「歴史的景観が残る金屋の街並みを
考慮しながら、独自の空間を形成してい
る」盤若邸、「田園地帯にさりげない景観
をつくり、穏やかさと安らぎを創出して
いる」藤田邸の三件が選出。まちなみ景観部
門から「カリヨンやベンチ、植栽がある公園
を中心とした住宅地で、環境を育む住民の姿勢
が感じられる」横田町の「カリヨンのある街」
が選ばれた。

DESIGN TOPICS

[99年度デザインの動向]

第三十九回富山県デザイン展

高岡市の黒田氏が大賞受賞

平成十一年十二月十日から三日間に

わたり開催された富山県デザイン展。
今回は、一般・学生から合わせて五十一
点の出品があり、幅広い分野のデザイン
賞が富山県民会館に展示された。大

賞に選ばれたのは、高岡市の漆工芸家・
黒田昌吾氏の作品「漆板」。木の板に、黒
田氏がその感性のままに下地漆をへつ付
けして仕上げた「フルウエア」だ。端材
を大胆にカットしたフォルムと、漆の質

③能代唯一の春慶塗元、石岡庄寿郎の職人芸、透けた
生漆が美しい。
④デ・ルツキ氏自らが近年始めた少ロットの自主製品
の一つで、広い事務所の中にショールームがある。イ
タリアよりも少なくなることは、アルチザンの腕が
冴えた金属の仕事である。

⑤(6)いずれもデザイナーの署名の入ったミニマムロット
のガラス。ボウルのフロスト、サンドブラストの手法
はベースの型と同じであるが、表情は微妙に異なる。
一方の花瓶は木の型に吹き込むガラスで、木型の焼
け焦げが微妙な肌合いをつくる。量産の金型のもの
はいかにも作為的でつまらなくなる。いずれも発表
当時、新鮮な驚きを受けた。

それぞれ自分にとってストーリーのあるものであり、
資料でもあるプロダクト。仕事柄、旅先で気になって買
い求めたり、探し回って手にしたもの等が増え、事務所
のあちこちに居場所を得ているモノたちの一部である。
のほうが好きであると同時に、それぞの国の伝統
の繋がりとその奥行きのことを知らされる。

①イタリアのキアヴァリ地方で十八世紀中期よりつく
り続けられている小椅子で、ジオボンティデザインの
スーパー・レッジエラの原型になるものである。私はこ
のほうが好きであると同時に、それぞの国の伝統
の繋がりとその奥行きのことを知らされる。

②マンジャロッティ事務所時代に、開発担当した照明器
具。ムラノ島の今はしないヴィストージ社に打ち合わ
せに行つた思い出深いもの。吹きガラスを職人が振
り回すのはこの大きさが限度である。

思い出もあり、
それぞれのプロダクトたち。
仕事の資料でもある

思い出でもあり、
それぞれのプロダクトたち。

川上デザインルーム(東京・渋谷区)にて撮影



①アヴィアリ チェア(セディイ アルティスティカ キアヴァレーゼ社)
②サッフォ(アルテミス社) D:アンジェロ・マンジャロッティ
③水指(能代春慶塗)
④キャンドルスタンド(Produzione Privata)
D:ミケーレ・デルッキ
⑤ボウル(コスタ ポダ社) D:パルテル・ヴァーリ
⑥花瓶(イッタラ社) D:ティモ・サルバネ
⑦重ね碗(能作)
⑧HANA_KAZE(デザインハウス・アワ) D:栗辻 博
⑨カーラー(クレム・ムナリ社) D:カルロ・スカルパ
⑩花瓶(サンボネ社) D:エンツォ・マーリ
⑪花瓶(ラリック社)
⑫魚皿(サンボネ社) D:ロベルト・サンボネ
⑬スタティック(ローレンツ社) D:リチャード・サーバー
⑭スモーグラス(リーデル社) D:ジョエ・コロンボ
⑮サラダ サーバー(ジョージ・ジョンソン社)

川上 元美
1940年兵庫県生まれ。'66年東京芸術大学大学院美術研究科修了課程修了。その後'68年までアンジェロ・マンジャロッティ建築事務所(ミラノ)勤務。'71年川上デザインルーム設立。クラフト、工業デザインから家具、空間、景観デザインなど、幅広いジャンルの仕事を手がけている。アメリカ建築家協会(AIA)主催エアコンペ1席、毎日デザイン賞、国際高太郎建築工芸賞、Gマーク金賞、IF賞(ドイツ)、土木学会田中賞、横浜まちなみ景観賞など受賞多数。'91年から工芸都市高岡クラフトコンペの審査員を4回務める。

⑯おおらかなシェーブルと質感の高いサーバー。
(文／川上元美)



〈デザイン大賞〉漆板／黒田昌吾

ジャパンポスター・デザイングランプリ'99 環境問題ポスター全国公募で グランプリ獲得

滋賀県長浜市で開催された「ジャパン
ポスター・デザイングランプリ'99」(平成
十一年十月六・七・十一日)において、応募
総数三三七点の中から高岡市のグラフィ
ックデザイナー・中山真由美さんの作品
がグランプリに輝いた。同展実行委員
会が全国に公募したものの、課題部門の
テーマは「水」。中山さんの作品は、家庭
から流れれる汚水をモチーフにしたイラ
ストと、「ECHO」のタイポグラフィを組み
合わせて、一人ひとりの工事が地球全体
の汚染に繋がることを警鐘。個人レベル
での環境保全に対する意識の向上を呼
びかけている。イラストは、前衛書の手
法を参考に墨一色で表現。流れ落ちる
墨の偶然性を生かしながら、計算された
デザイン処理によりインパクトのある
ビジュアルに仕上げている。審査員から
は「シンプルな作品表現の中に個人の
立場から水の汚染を訴える、力強いメッ
セージが込められている」(岡本滋夫
JAGDA理事他)と評価された。

川上 元美
1940年兵庫県生まれ。'66年東京芸術大学大学院美術研究科修了課程修了。その後'68年までアンジェロ・マンジャロッティ建築事務所(ミラノ)勤務。'71年川上デザインルーム設立。クラフト、工業デザインから家具、空間、景観デザインなど、幅広いジャンルの仕事を手がけている。アメリカ建築家協会(AIA)主催エアコンペ1席、毎日デザイン賞、国際高太郎建築工芸賞、Gマーク金賞、IF賞(ドイツ)、土木学会田中賞、横浜まちなみ景観賞など受賞多数。'91年から工芸都市高岡クラフトコンペの審査員を4回務める。

⑦伝統的コンパクトカルチャの典型、重ね椀。
⑧ステキスタイルデザイナーの栗辻博氏のモノトーンにし
て強烈なインパクトのある磁器で、材質そのもの
高いクオリティーをもつ。
⑨モダンな銀器で知られるムナリ社のために、カルロ・スカラ
ルバがデザインしたもの。そこはかとなく世紀末ヴィ
ークの薫りを漂わせる、ディール豊かなカトラリー。
⑩六〇年代後半、エンツォ・マーリがアクリルの重合で
さまざまなカラーの美しいブローフをデザインした。
この素材で蓋にした菓子器である。
⑪铸型のよくできたプレスガラス。パリのノミの市な
どで幾つか買い求めたが私は一連のデコスタイルの
シユに駆け抜け抜けていたコロンボのアイデアに満ちた
のイタリアデザイン全盛期のグッドデザインである。
⑫古くから知りを得たサンボネ氏の自社製品。
⑬この置き時計スタイルは、⑭とともに六〇年代
のイタリアデザイン全盛期のグッドデザインである。
ステンレスでありながら実に温かいフォルムをして
いる。写真にはないが、キャセロールなどと共にサルバ
ネバ独特の気品に満ちたオバ社の商品も合理化や効
率化、そしてグローバル化等で市場から消えた。私
はステルンよりも好きである。
⑮六〇年代のイタリアデザインの黄金期を、エネルギッ
シユに駆け抜け抜けていたコロンボのアイデアに満ちた
グラス。ミラショーンのショールームでデザインを手伝
ったとき、バイブルをいつも□から放さないハビースモ
ーカーの彼が、パーティの席で面白おかしく片手
にシガーとこのグラスをこのように持つて、と説明
してくれた。
⑯おおらかなシェーブルと質感の高いサーバー。
(文／川上元美)

わたしと高岡

高岡クラフトコンペ

技術を身に付けなければ、本当に良いデザインはできない。



高岡'86クラフトコンペグランプリ「パーティの器(もてなしの器)」

一九八六年に始まった高岡クラフトコンペ。町田さんは、その記念すべき第一回グランプリ受賞者である。素地のもう美しい線でまとめられた受賞作『パーティの器(もてなしの器)』は、直線構成を避け、かすかな曲線を造形面と機能面に生かした斬新な着想が高く評価された。日本クラフトデザイン協会会員時代には、漆芸家として同協会が主催する日本クラフト展の審査員も務めている。そんな町田さんは、岩手県立産業デザインセンター上席専門研究員という、もうひとつの肩書きをもつ。

同センターは、県内中小企業のデザイン的・技術的支援を行う県の研究機関だ。南部鉄器、漆器、木工製品など、岩手県の地場産業に関わるさまざまな分野で、研究開発をはじめ、技術相談、依頼試験、設備開放、情報提供を行っている。

デザイン力の向上を目指し、ワークショップ企画

ここでの町田さんの仕事は、特定のクライアントのための研究開発よりも、地場産業の後継者育成や流通・販路の開拓など、さまざまなテーマで講演会を企画したり原稿を書いたりすることが多い。

取材に訪れたとき、町田さんはちょうど「北国デザインワークショップ3」の開催準備に追われていた。フィンランドを代表する工業デザイナーのシモ・ヘイッキラさんを招き、製品デザインの進め方に関する講演会と岩手県の地場産業製品のデザイン改善指導を行うという内容だ。

高岡発 素材 & 技術

2

モノづくりの町・高岡を下から支えているのが、新しい素材や技術の開発。起業家精神に満ちあふれた技術者たちが日夜研究にいそしみ、新素材・新技術を生むべく努力している。ここではその基礎となる新しい素材や技術の開発動向をレポートする。

人に地球にやさしい 鉛レス合金の開発

高岡銅器と鉛といつてピッタリないかも知れないが、銅合金にはある割合の鉛成分が含まれている。だが近年、鉛の毒性による人体への影響や環境汚染が問題化、確かに鉛は、融点が低く加工性に優れるため、電子基板のハンダや合金メッキなど、その用途も幅広い。しかし、破棄された製品から土壤に溶け出する危険性もあり、消耗品・量産品のメーカーを中心リサイクルや代替素材へのシフトが進められている。現在のこと、銅製品において鉛の使用を制限する動きはないものの、将来の規制拡大も懸念されることから、高岡銅器でも新材料の研究・開発は緊急の課題といえよう。こうした時代の趨勢に応えるべく、高岡市「デザイン・工芸センター」の呼びかけにより「鉛レス素材開発研究会」が発足した。平成十一年七月二十一日には、高岡銅器の一四業者が集まり、鉛を含まない銅合金の実験が開始された。

銅合金は、製品によって配合がさまざまだ

ある。高岡銅器の主流は、銅六〇～七〇%と鉛三〇～四〇%、約一%の鉛を加えたものだ。このうち、鉛に代わる成分として「スズ」「アソチモン」「ビスマス」「シリコン」を配合。各合金の特性を從来のものと比較しながら分析する。鋳造実験では、生型鋳造法とシェルモールド鋳造法により試験用のテストピースをつくり、各合金の湯流れ粘度や膨張によるピンホールの発生などを調べた。また、着色実験では、さまざまな着色法によつて塗膜の表情や結晶の浮き出し方を比較。平成十二年一月現在では、まだ詳しい結果は出ていないが、青銅色の場合、すべての合金が従来と同質に仕上がることがわかった。この後、切削や強度などの実験を重ねながら、必要に応じて成分の配合を調整。鋳物素材としての完成度を高めていく。

研究結果は、高岡銅器の関係者をはじめ広く一般に公開。平成十二年度中には、研究結果や「コストなどをトータルに検討しながら、「鉛レス合金」による新商品の開発を目指す。



切削実験により合金の加工性を分析



鋳造実験の注湯工程

生型鋳造法の鋳型づくり

異素材を組み合わせた作品 が誕生

キネティック・アート……。通常、芸術作品は静的なものだが、これに動きを加えたものをいう。そのキネティック・アートに光の要素を加味して製品化したものが、「オーロラ」をはじめとする動く明かりシリーズの三作品。素材のアルミニウムは高岡、和紙は八尾、ステンレスは東京や千葉、光ファイバーは栃木や静岡、そしてメカは東京や埼玉と、各地の素材により構成されている。

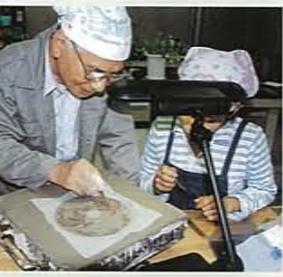
動く明かりシリーズは、伝統工芸高岡銅器振興協同組合とクラフト作家・志村雄さんのコラボレーションによってできたものであるが、同協同組合では、他素材との融合を評価。光ファイバーなどのハイテク技術と鋳物や和紙という伝統的な素材を組み合せた新クラフト感覚の照明器具が誕生した。



写真左より「オーロラ」、「和の光彩」、「デュエット」

Information from 高岡市デザイン・工芸センター

型押しの指導の様子。半乾燥の双型に模様を書いた和紙を張り、籠で模様が浮き出るように押していく。



伝統工芸の技術を次世代に残し、かつ新たな技法を興して伝統の礎を築こうと高岡市デザイン・工芸センターでは、各種の事業を展開している。ここでは、その代表的なものを紹介しよう。

伝統工芸産業の後継者育成 技術伝承講座

伝統工芸の技術を次世代に残し、かつ新たな技法を興して伝統の礎を築こうと高岡市デザイン・工芸センターでは、各種の事業を展開している。ここでは、その代表的なものを紹介しよう。

高岡市「デザイン・工芸センター」では、前身の高岡市「工芸センター」では、前引継ぎ、伝統工芸産業の後継者育成を目的とした養成スクールの一環として、短期の技術伝承講座を開催している。卓越した技術を有する著名な工芸作家を招聘し、講義や実習を通じて技術や専門知識の習得を図り、産地技術力の向上を目

指そうというのだ。

平成十一年度の講師には、日本工芸会理事の根来茂昌さん（横浜市）を招いた。型押しとは、双型で引いた鋳型が完全に乾燥する前に、籠で押し模様をつける技法。高岡にも双型の技術は伝承されているものの、本格的な型押しの双型は受け継がれていません。

そこで、型押し双型では第一人者の根来さんを講師として講座を開催。高岡銅器の技術の幅を広げる狙いのもと、十月に四日間にわたりて催された。

講座の課題は「銅鏡つくり」。銅と錫の合金の一方を磨き上げて鏡に仕上げ、もう一方の面を型押しして模様を浮き立たせるというものである。

講座に参加した一〇名の受講生は、鏡引き型つくり、籠押し、石膏取り、籠押しお上げ、铸造などの実習をこなしながら銅鏡つくりに取り組んだ。

育成者は、高岡市伝統工芸産業技術保持者や伝統工芸士。また、継承者は、高岡市が開講する伝統工芸産業技術者養成スクール修了生をはじめ、高岡短期大学産業工芸学科や美術系大学の関連学科の卒業生で、継承する伝統技術を生業とする意

平成12年度工芸体験実習開催予定

高岡市デザイン・工芸センターでは、平成12年度に下記の工芸体験実習を予定しています。諸事情により日程や内容が変更する場合もありますので、ホームページもしくはお電話にてご確認ください。

■親子体験実習(1回コース) 親子2名1組(子どもは小学3年生以上)

日 程	内 容
金 平成12年 7月16日(日)	鏡物でルームプレートをつくる
工 // 8月20日(日)	鏡物で日時計をつくる
漆 // 7月23日(日)	塗りでマイカップをつくる
工 // 8月 6日(日)	螺鈿で石のペバーウエイトをつくる

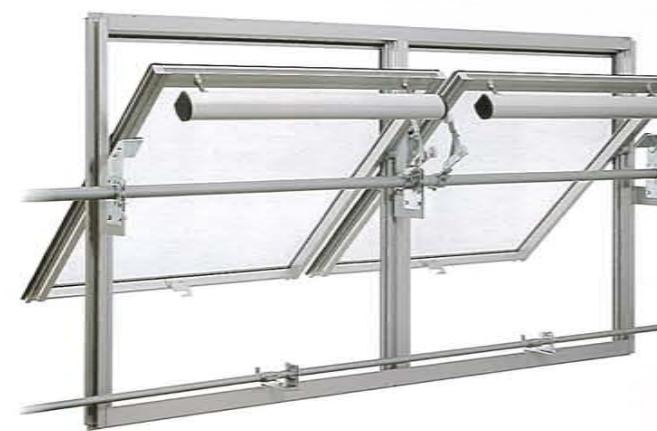
■市民体験実習(1回コース) 15歳以上的一般

金 平成12年 5月21日(日)	鏡物でフォトスタンドをつくる
工 // 12月 3日(日)	鏡物でキャンドルスタンドをつくる
漆 平成13年 2月18日(日)	鏡物で時計をつくる
工 平成13年 5月28日(日)	蒔絵で手鏡をつくる
漆 // 12月10日(日)	蒔絵で羽子板をつくる
工 平成13年 2月11日(日)	蒔絵で雛人形をつくる

■市民工芸実習(4回コース) 15歳以上的一般・経験者	
金 平成12年11月10日からの毎金曜	蝶型による小物制作
工 平成13年3月2日からの毎金曜	鍛造で皿をつくる
漆 平成12年6月9日からの毎金曜	変塗・蒔絵による器制作
工 // 12月1日からの毎金曜	変塗のマット・椀・箸制作

(注)11月10日からの「蝶型による小物制作」の4回目は11月30日(木)の予定です。

高岡市デザイン・工芸センター
〒933-1119 富山県高岡市オフィスパーク5番地 TEL.0766-62-0520 FAX.0766-62-0521
http://www.suncenter.co.jp/takaoka/



5 世界初の自然換気システム「スwindow」

自然の風を利用して室内の換気を行う世界初の自然換気システムです。建物の周囲に発生する気圧変化を利用し、風の通り道をつくって窓が自然に開閉することで、クリーンでエコロジーな自然換気を実現。'99年度のグッドデザイン賞を受賞しました。

●主材料・材形/JIS H4100に規定するA6063S-T5を使用 ●性能/耐風圧性:S-5(2400pa)、気密性:A-4(2等級線)、水密性:W-5(500pa)、遮音性:T-1(25等級線) ●カラー/シルバー、ステンカラー、ダークブルー、ブラック ●システム価格一式/1,082,000円より ●システム内容(排気スwindow)2連×2箇所(4枚)手動式オペレータータイプ(給気スwindow)2連×2箇所(4枚)オペレーター無し(カムラッパンドル) [サイズ]W208×H100cm [カラー] シルバー ●問合せ/立山アルミニウム工業株式会社 0766-20-3321

6 新しい光の世界を放つ キネティック・ライト・アート

流れる光、ゆらめく光、幻想的な光、と自然界からのイメージーションを感じさせてくれる、光の環境影刻といえる照明器具です。3シリーズともデザインと製作監修は、キネティック・ライト・アート作家の志村雄逸氏。高岡銅器の技術と光学素材とが融合した、不思議な明かりです。

●サイズ/〈デュエット〉W21×H85×D7cm(オーロラ) W18×H42.5×D18cm(和の光彩) W50×H35×D18cm ●仕様/3点とも本体は高耐食性アルミAC-7A(デュエット)SUS、電子制御(オーロラ)レンズ用高透過性ガラス(和の光彩)光ファイバー、手漉き和紙(越中八尾)、電子制御 ●カラー/〈デュエット〉鏡面、銀梨、バール(オーロラ)鏡梨、赤紫、鉄鏡(和の光彩)鏡面、銀梨、利休緑 ●価格/未定 ●問合せ/伝統工芸高岡銅器振興協同組合 0766-24-8565



7 景観演出の タウンズスパイズシリーズ

アルミの金属感を生かしたシンプルなデザインと、リサイクルやメンテナンスフリーが評価され'99年度のグッドデザイン賞を受賞。時計台は太陽電池と自動時刻補正機能を搭載、ベンチにはリサイクルに優れた人工木が採用されています。

●サイズ(重量)/街路灯H500cm(約110kg)、時計台H500cm(約120kg)、ベンチW200×H41×D55cm(約70kg) ●ベンチの素材/アルミ、人工木(木粉70%、樹脂30%)、銅製補強 ●価格/街路灯:1,150,000円、時計台(両面時計型):1,250,000円、ベンチ:385,000円 ●いずれも工事費別途 ●問合せ/三協アルミニウム工業株式会社 0766-20-3559

2 思い出のシーンを飾る キャンドルスタンド

色付きガラスタイルは、ほんのりボカシが入っています。幾何学模様タイプのデザインは、ガラスを素材に公共空間やプロダクトで活躍している趙慶姫さん。モノリアルな夜は、灯の元で語らうのも素敵かも。ガラスプレートは取り外せるので、小物入れにも使えそうです。

●サイズ/φ9×H3.8~6.7cm ●素材/ガラス、真鍮(ニッケルメッキと金メッキ) ●カラー/サンダーガラス、ブルー、ピンク ●価格/3,900円より(和ロウソク付) ●問合せ/株ニュース・インターナショナル 0766-28-2210



1 ホット&アート暖和

インテリアと暖房器具の機能を合わせ持った屏風と額縁。面状発熱体の表面にアルミ板を張り合わせ、シルク印刷された作品が施されています。自動制御装置があり、過熱や断線の心配はありません。屏風タイプ各種のほかに、洋画を用いた額縁タイプもあります。

〈二曲屏風「扇面」〉 ●サイズ/W125×H92×D2cm ●消費電力料/約8円(1時間) ●価格/110,000円(アルミ額「ストックホルム」) ●サイズ/W52×H72×D3cm ●消費電力料/約1.8円(1時間) ●価格/43,000円(各種仕様、サイズあり) ●問合せ/株サン美術工芸 0766-21-6112



4 シンプルという存在感の FeetとFlowerVase

「Feet」は'95高岡クラフトコンペのグランプリ受賞作品(眞戸琢也氏)を、コラボレーションにより発展させて商品化を進めたものです。緊張感に満ちたエレガントな脚の曲線がとても印象的。一方の花器は、三原昌平氏(プロダクトデザイナー)がデザインした、いつまでも飽きの来ないベーシックなフォルムが美しい。どちらも、生活中で新しい物語の始まりを予感させてくれそうです。

〈Feet〉 ●サイズ/角形サイドテーブル:W45×H54.5×D45cm、楕円ローテーブル:W110×H36×D60cm ●主材料/脚部:高耐食性アルミ(AC-7A)、天板:MDF+ブナ突板貼り ●価格/未定(8月発売予定) 〈FlowerVase〉 ●サイズ/①φ9.3×H15cm ②φ12.4×H20cm ③W132×H12×D7cm ④W154×H12×D6.2cm ●素材/高耐食性アルミ(AC-7A) ●価格/①は3,800円、他は5,000円 ●問合せ/株タカタレムノス 0766-24-5731

「モノづくりの町」と形容される通り、いま高岡では、新技術を駆使して、デザインされた商品やコンペ入賞作品を商品化したプロダクトなど、素材、技術、デザインにこだわったモノがいくつも生まれています。その中から、暮らしを楽しく彩る商品を使い心地のいい「お気に入り」、こだわりの高岡ブランドの中から見つけてみませんか。